2014年度

国語

（問題）

〈H26080018〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～7ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、試験開始後、解答用紙の氏名欄に氏名を正確に丁寧に記入すること。

（2）マーク欄には、はっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	●良い	○悪い	○悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	○悪い

5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

8 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。（なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。）

円谷英二が始めた日本の特撮は、精巧なミニチュアで作られた町や山や海を舞台に、怪獣やヒーローやスーパーマシンたちが活躍し、見る者をワクワクさせてきました。しかし現在、特撮は、デジタル技術の発展と共に形を変え、その価値を見直す岐路に立たされていると言えます。（中略）本展覧会は、特撮のこうした状況を何とかしたいとかねてから考えてきた庵野秀明が、「館長」となって「博物館」を立ち上げた、というコンセプトのもとで開催します。

（「館長　庵野秀明　特撮博物館」東京都現代美術館公式ホームページより）

展示の初日に行こう、と決めていました。一ヵ月以上前からスケジュールを空けていました。特典つきの限定三〇〇〇枚のチケットをコンビニエンス・ストアで予約して、指折り数えてこの日を待っていました。二〇一二年七月のこの週は息抜きしよう、遊ぼうと心に決めて、この日を待っていたくらいです。

実を言うと、その日まで僕はひどく落ち込んでいました。理由は他愛もないことです。その前々日の日曜日、僕は国際展示場で催されたあるアイドルグループの握手会でちょっとした失敗をしてしまっていました。握手のスケジュールを甘く見積もっていて、時間内に複数のメンバーのブースを回ることができずに握手券を二枚も無駄にしてしまったのです。まったく同情の余地のない、完全に自己責任の失敗です。他の誰かのせいでもなければ、格差社会やグローバル資本主義のせいでもありません。強いて言うなら僕の見積もりが甘くなったのは、僕も運営側も予測できなかったレベルでの混雑です。予想外の数のファンが殺到した結果、会場で小さな混乱が起こっていたのです。僕は正直、落ち込んだけれどその一方であの空間に満ちていた混沌とした圧倒的な力には、やはり何かを期待させるものを感じていました。

そして訪れた七月一〇日、僕は朝の九時過ぎには家を出て、タクシーを捕まえました。神保町の交差点で、徹夜で仕事をしていたらしい友人を拾って清澄白河に飛ばしました。すでに会場は混雑していて、平日の昼間、それも午前中にどこから湧いて出たんだろうというくらい、そこには大人たちが、いや「おおきなおともだち」がいっぱい集まっていました。平均年齢も高くて、三三歳の僕はあの中ではたぶんかなり若い方だったと思います。僕らはそんな状況がもたらす奇妙な居心地に少し戸惑いながら、この博物館の奥へ、奥へと入っていきました。

特撮の歴史とは、戦後日本の精神史でもあります。『ウルトラ』シリーズの生みの親として知られる「特撮の父」円谷英二は独自の特撮技術を開発し戦前から映画界で活躍していましたが、その技術を政府に評価され戦時中は当時所属していた東宝の社員として数多くの戦意高揚映画の制作に関わりました。後に円谷が怪獣映画などで駆使する特撮技術の多くが、この時期の戦意高揚映画の制作の中で培われたと言われています。そして終戦後、公職追放で一時期東宝を追われた後に復帰し、戦争映画などの特技監督をⓐツトめました。そのかたわら、日本初の本格特撮映画『ゴジラ』を発表し、国内に「怪獣映画」というジャンルを確立することになります。

広く知られているように、怪獣ゴジラはアメリカの核実験によって怪獣に変異した古代生物で、一九五四年の公開当時、東京を焼け野原に変えるその襲撃は空襲の再来として受け止められました。その来歴から明らかなように、円谷的な想像力とは少なくとも「政治の季節」と呼ばれた六〇年代までは国家や軍隊といった①大文字の「政治」性と密接な関係をもち、そこで描かれる巨大なもの（怪獣など）による都市破壊は、国家による暴力――つまり戦争による社会破壊が重ね合わされています。

たとえば『ウルトラマン』（一九六六～六七年）、『ウルトラセブン』（一九六七～六八年）の二作は、サンフランシスコ体制の比喩として繰り返し読解されてきた歴史があります。すなわち高度成長期の日本の街並みを襲う怪獣や宇宙人は東側諸国の侵攻軍であり、それを撃退すべく組織されながらも見るからに戦力不足の「科学特捜隊」や「ウルトラ警備隊」といった防衛組織は日本の自衛隊、そして防衛組織に代わって侵略者を退治してくれるウルトラマンやウルトラセブンは在日米軍、という見立てになります。

二〇世紀という「戦争の世紀」の表舞台で活躍した、国民国家による暴力装置＝**A**へのおそれと憧れが複雑に入り混じった感情が、子ども番組という不自由な枠組みに軟着陸したときに生まれた奇形的な想像力――それが戦後日本のミニチュア特撮の本質です。それは強大なものへの憧れと、それをストレートに表現することを許してくれない敗戦の傷跡――自分たち日本こそが悪の侵略者だったという歴史の呪縛――が複雑に絡み合うことで生まれた、永遠の「一二歳の少年」の自画像です。怪獣映画やウルトラマンはあらゆる意味において戦争映画のアイロニカルな代替物＝**B**であった、と言えるでしょう。

1

そして戦争映画の代替物として発展した戦後怪獣映画は、戦後社会の変化とともにゆるやかに終焉していきました。それは奇しくもミニチュア特撮という文化の勃興と衰退の歴史に重なります。二一世紀の日本の「特撮」の主流はむしろチャンバラ劇の流れをくむ東映系の等身大ヒーロー――『仮面ライダー』シリーズや『スーパー戦隊』シリーズで、怪獣映画の類の人気は下火になって久しいものがあります。これらの番組においてはいわゆる「殺陣」を中心としたアクションが中核にあり、ミニチュア特撮は補助的な要素でしかありません。物語的にも、一九七〇年代の勃興期から、怪獣映画や『ウルトラ』シリーズが否応なく孕んでいた戦後的政治性の呪縛から解放された、自由で政治性の希薄な、痛快娯楽劇が展開されることが多かったのです。

2

展示のクライマックスは、庵野秀明と樋口真嗣による短編映画『巨神兵東京に現わる』でした。宮崎駿の映画／漫画『風の谷のナウシカ』に登場する巨大人型兵器「巨神兵」が現代の東京に襲来し、街々を一瞬で灰燼に帰するその過程

を、今失われつつあるミニチュア特撮技術の粋をⓑコらして撮影した九分間の短編映画です。

半世紀以上の時間をかけて積み重ねられ、伝えられてきた技術を惜しみなく投入したその映像は、特撮ファンの僕のひいき目を差し引いても、最新のコンピューター・グラフィックス技術を駆使したハリウッド映画と比べても遜色がないように見えました。

その日、巨神兵のフィギュアと図録を買い込んで帰路についた僕たちは、たまたま目についた森下のさくら鍋屋さんでちょっと贅沢なランチを楽しみ、デザートにはその近くの氷屋さんに小学生と一緒に並んで店の前のベンチに腰を下ろしました。真昼の真っ白な太陽の下で山盛りの氷イチゴを食べました。まだ午後の早い時間だったけれど、いい一日だったと思いました。すばらしい展示だったし、すばらしい映画だった。

でも……崩れ落ちそうになる氷の山をストローでつつきながら、同行した友人が遠慮がちに述べたのです。「展示も映画も素晴らしい。あの映画の映像で用いられていたミニチュア特撮もすごい職人技だと思う。しかし上映直後、②隣に座ってた中学生くらいの女の子が『CGみたいですごいね』と感想を漏らしたのを聞いたか」と。

3

『巨神兵東京に現わる』を観ると、そこに描かれた二〇世紀後半的（冷戦期的）な終末観がすでに過去のものでしかないことを痛感させられます。映像にⓒソえられた舞城王太郎の「詩」を、林原めぐみが読み上げることで語られる終末観（ある日、空から巨大なもの＝核兵器が降ってきて、世界が一瞬で終わる）にせよ、スタッフたちがメイキングで語る「こんな時代だからこそミニチュア特撮を」という自意識＝アイロニーにせよ、すべてノスタルジィとしてしか機能しないことを（おそらくは企画製作者が意図した以上に）改めて思い知らされてしまいます。

4

福島の原子力発電所の問題ひとつとってもそれは明らかでしょう。人類の傲慢＝ C が僕たちの世界を変えるとき、それはかつて冷戦時代に夢想された核戦争のように（そしてこの映画で描かれた巨神兵の襲来のように）一瞬ですべてをリセットするのではなく、何十年もの時間をかけてゆっくりと、蝕むように少しずつ日常の中から僕らの世界を変えていきます。あるいはどれほど作中で「いま」の東京をミニチュアで再現し、シナリオに携帯電話の出てくるシーンを組み込んだとしても、その一方で電柱や東京タワーといった「昭和」的アイコンの力を借りなければ彼らは表現を構築できません。

5

この映画はコンセプチュアルであるがゆえに、二〇世紀後半的（冷戦的）な世界観／終末観と、ミニチュア特撮の育んできた③アイロニカルな想像力では（物語的にも手法的にも）現代を描くことができないことを決定的に告白してしまっています。怪獣映画もミニチュア特撮も戦後的アイロニーも二〇世紀後半的（冷戦的）な終末観も、すべて過去のもので、もはや④ノスタルジィしかもたらしません。だからこそ、これらは博物館で展示されるものに相応しいのです。そこには過去しかありません。よって今やそれは誰も傷つけません。安全な表現だからです。冷戦下に育まれた「世界の終わり」のイメージ、そして戦後的想像力はいよいよ「終わり」を迎えてしまったのだ、と僕は確信しました。とくに「あの日」からは。

（宇野常寛『日本文化の論点』より）

問一 傍線部ⓐ～ⓒのカタカナを漢字に改めるとき、同じ漢字をカタカナの部分に用いるものは、次の1～5の中のどれか。それぞれ一つずつ選んで解答欄にマークせよ。

ⓐ
1 煩雑な事ム
2 皆キン賞
3 不断のド力
4 ベン学の奨励
5 責ニンの所在

ⓑ
1 ギ音語を使う
2 チョウ役刑
3 カン忍袋
4 果汁をノウ縮する
5 液体がギョウ固する

ⓒ
1 答案のテン削
2 フク作用
3 薬のテン滴
4 切手のチョウ付
5 エン岸の警備

問二 次の段落が入る位置として最も適切な箇所を、本文の 1 ～ 5 の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

すなわち冷戦が終結し、戦後的な社会構造がゆるやかに解体されてゆく中で、戦後的な政治性に強くその精神性を依存していたミニチュア特撮は、技術的にも物語的にも衰微していくことになったわけです。そしてその衰微があったからこそ、これらの文化の「遺産」は博物館に収められることになった、と言えるでしょう。

問三 空欄 A ～ C に入る言葉として最も適切なものを、それぞれ次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

A
1 空襲
2 軍隊
3 戦争
4 破壊
5 侵略

B
1 ヒーロー
2 特撮
3 ミニチュア
4 子ども番組
5 傷跡

C
1 怪獣ゴジラ
2 核兵器
3 核実験
4 核の力
5 原爆

問四 傍線部①「大文字の「政治」性」という表現の説明として**適切でないもの**を、次の**1**～**5**の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 戦後日本の精神史を代表するもの
2 二〇世紀の表舞台で活躍した装置
3 自分たちが侵略者だったという歴史の呪縛
4 おそれや憧れの対象となる強大なもの
5 戦後的な社会構造を構築してきたもの

問五 傍線部②「隣に座ってた中学生くらいの女の子が『CGみたいですごいね』と感想を漏らしたのを聞いたか」という友人の発言は何を意味しているか。その説明として最も適切なものを、次の**1**～**5**の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 中学生の言葉から、ミニチュア特撮技術を結集して撮影した映像が、最新のCG技術を駆使したハリウッド映画と比べても遜色がないほど優れていることが確認できてうれしい。
2 中学生の言葉から、精巧なミニチュアで作られた町や山や海を舞台に、怪獣やヒーローやスーパーマシンたちが活躍する特撮は今なお、見る者をワクワクさせていることが分かる。
3 『巨神兵東京に現わる』を現在のCGになぞらえる中学生の言葉は、どんなに優れた映像でも、ミニチュア特撮がすでに過去のものでしかないことを物語っている。
4 『巨神兵東京に現わる』は「いま」の東京を再現した優れた映像だとしても、中学生の言葉は、ミニチュア特撮のリアリティがCGに及ばないことを示している。
5 宮崎駿の映画／漫画に登場する「巨神兵」が現代の東京に襲来し、街々を一瞬で破壊するテーマは、本来アニメやCGに相応しいことを、中学生の発言は明らかにしている。

問六 傍線部③「アイロニカルな想像力」と同じ意味で用いられている言葉として最も適切なものを、次の**1**～**5**の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 おそれと憧れが複雑に入り混じった感情
2 戦後的政治性の呪縛からの解放
3 舞城王太郎の「詩」が語る終末観
4 スタッフたちがメイキングで語る自意識
5 一瞬ですべてをリセットするという夢想

問七 傍線部④「ノスタルジィ」の例として挙げられている文中の語句として**適切でないもの**を、次の**1**～**5**の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 巨大なもの（怪獣など）による都市破壊
2 『仮面ライダー』シリーズや『スーパー戦隊』シリーズ
3 ある日、空から巨大なもの＝核兵器が降ってきて、世界が一瞬で終わるという終末観
4 「こんな時代だからこそミニチュア特撮を」という自意識
5 電柱や東京タワーといった「昭和」的アイコン

問八 本文の内容と一致するものを、次の**1**～**7**の中から**二つ**選んで解答欄にマークせよ。

1 怪獣やヒーローやスーパーマシンたちが活躍し、見る者をワクワクさせてきたミニチュア特撮は、デジタル技術の発展とともに形を変え、その価値を見直す岐路に立たされている。
2 ミニチュア特撮は見る者の多くをワクワクさせてきたが、過去のものとなりつつある。それは、アイドルグループの握手会が未来に向けて期待を感じさせるのと対照的である。
3 ミニチュア特撮は戦後的政治性を孕んできたが、『仮面ライダー』シリーズや『スーパー戦隊』シリーズなどの等身大ヒーローに淘汰されて、その役割を果たせなくなった。
4 ハリウッド映画と比べても遜色がない『巨神兵東京に現わる』は、ノスタルジィにほかならないが、同時にミニチュア特撮がこれから生き残っていく可能性の方向を示唆している。
5 アメリカの核実験によって怪獣に変異したゴジラが東京の街々を破壊する恐怖は、まったく現代的なものに姿をかえ、福島原発事故の恐怖として今日の社会に甦った。
6 ミニチュア特撮が繰り返し描いてきた都市破壊や世界の終わりは、戦後的政治性の呪縛を内包していたが、最終的には誰も傷つけない安全な表現になってしまった。
7 地震と原発事故の「あの日」があったことによって、徹底的な都市破壊といった「世界の終わり」を繰り返し描いてきたミニチュア特撮は「終わり」を迎えてしまった。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。（なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。）

光源氏は、諸々の学芸を論評するにあたって、しばしば、昔の世に比べて今の世が劣っているという価値判断に立っている。すぐれたものが時代が降るにしたがって退歩しているという判断である。しかし、それには例外もある。たとえば、仮名の書についての論評が次のように語り出される。

よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。（梅枝）

ここでいう「仮名」は、「女手」と呼ばれる連綿体の平仮名のことである。この物語の書かれた時代は、三蹟と讃えられた名手たち（小野道風・藤原佐理・藤原行成）も輩出して、連綿体の美が競われた時期なので、あるいはそうした歴史的な動向がここに反映しているのかもしれない。物語の源氏は、その名手として、すでに故人となった六条御息所・藤壺中宮を回顧しながら、さらに朧月夜・朝顔の姫君・紫の上もその範疇に属すとしている。

源氏は蛍兵部卿宮から名宝、嵯峨天皇宸筆の古万葉と、醍醐天皇宸筆の古今集を進呈されるに及んで、次のように驚嘆する。

尽きせぬものかな。このごろの人は、ただかたそばを気色ばむにこそありけれ。（梅枝）

ここに嵯峨・醍醐の宸筆を持ちこむのにはどんな意味があるのだろう。右の叙述は、前の「仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる」と一見するところ、矛盾しそうにも思われる。

前掲の源氏の論評「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末」とは、すべてが時代とともに衰えてゆくことを意味し、現今の時代は末世だという認識によっている。しかしこれは、源氏の単なる尚古思想でもなければ末法思想でもない。右の文脈に［A］考えると、昔とは嵯峨帝や醍醐帝の書のような奇跡的な逸品を産み出すことのできた時代のことであり、物語の論理との関連でいえば、そうした時代がどこかで虚構としての物語世界に連なっているということである。つまり、奇跡を産み出す時代に連なる世界だからこそ、光源氏のような巨大な人間像も存在しうる、というふうにである。第一、醍醐朝がどんなにすぐれた学芸を出来させた聖代であったとしても、光源氏ほどの超絶的な資質の人物は実在しなかった。実は、物語の世界に理想の古代をとりつけることが、この物語では虚構の重要な方法になっているであろう。右の文脈にもう一度立ち返ってみると、理想の古代を絶対視しながら、しかも源氏周辺の女君たちのすぐれた美質をも評価していることになる。源氏のこのような論評にしばしば見いだせる、時代の衰えという認識は①単なる文明批評には終始していない。

光源氏の晩年に至ってからの論評では、後世の価値低下を嘆く言辞がいっそう強められていく。その最もよい例が、六条院での女楽の終った後、夕霧を相手に語る音楽談義である。夕霧が春秋優劣論にふれると、源氏は、

いな、この定めよ。いにしへより人の分きかねたることを、末の世に下れる人のえ明らめはつまじくこそ。（若菜下）

と応じ、続いて現今の演奏家一般について、

ただ今、有職のおぼえ高きその人かの人、御前などにてたびたび試みさせたまふに、すぐれたるは数少なくなりたためるを、（若菜下）

と述べて、演奏技術の低下を慨嘆することになる。そして、とりわけ高貴な人の演奏にふさわしいとされる琴（七絃）については、特にすぐれた伝統がすたれたとする。

この琴は、まことに跡のままに尋ねとりたる昔の人は、天地をなびかし、鬼神の心をやはらげ、よろづの物の音のうちに従ひて、悲しび深き者も、よろこびに変り、賤しく貧しき者も、高き世に改まり、宝にあづかり、②世にゆるさるるたぐひ多かりけり。この国に弾き伝ふるはじめつ方まで、深くこのことを心得たる人は、多くの年を知らぬ国に過ぐし、身をなきになして、この琴をまねびとらむとまどひてだに、し得るはかたくなむありける。［B］、はた、明らかに空の月星を動かし、時ならぬ霜雪を降らせ、雲雷を騒がしたる例、上がりたる世にはありけり。かく限りなきものにて、そのままに習ひとる人のありがたく、世の末なればにや、いづこのそのかみの片はしにかあらむ。されど、なほ、かの鬼神の耳とどめ、かたぶきそめけるものなればにや、なまなまにまねびて、思ひかなはぬたぐひありける後、③これを弾く人よからずとかいふ難をつけてうるさきままに、今は、［C］伝ふる人なしとか。いと口惜しきことにこそあれ。琴の音を離れては何ごとをか物をととのへ知るしるべとはせむ。げに、よろづのこと、衰ふるさまはやすくなりゆく世の中に、独り出で離れて、心を立てて、唐土、高麗と、この世にまどひ歩き、親子を離れむことは、世の中にひがめる者になりぬべし。（若菜下）

はじめの琴の演奏の偉力を説くあたりは、『古今集』仮名序の「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」などの引用によっているが、琴もまた和歌の本性と同様に、他者を深く感動させる力を発揮するものだとしている。また、こうした偉力は過往の尋常ならざる精進によってもたらされたとあるが、ここには『うつほ物語』の、苦難の末に琴の神技を獲得したという俊蔭の漂流譚がふまえられている。ここでも、数々の奇瑞をもたらした理想の古代が志向されている。ところが現今では、その理想が等閑視され、たとえ技を習得すべく故国を離れてさまよう者がいたとしても、世の偏屈者としか扱われぬ時代になってしまった、と慨嘆している。現代は「世の末」であり、「衰ふるさまはやすくなりゆく世の中」だというのである。

それにしても、源氏はなぜこうも、現代を衰退の時代と慨嘆するのか。彼は前掲の叙述に続いて、自らの琴の習得をも顧みている。自分は若い時分からこれに熱中してきたが、昔の名人には追いつけそうにない、まして自分の後とあっては伝授できそうな子孫もないのがまったく心寂しい、と。ここで想起されるのは、女楽のやや手前のところで語られる、冷泉帝譲位の事態への源氏の感懐である。

思ひ悩ましき御事なうて過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世までは伝ふまじかりける御宿世、口惜しく [D] 思せど、（若菜下）

冷泉帝は、世間に知られざる源氏と藤壺の不義の子。実はその真相を秘かに知る冷泉帝によって、源氏は准太上天皇に遇されて異例の栄耀を得てきた。この六条院の宰主は、帝の知られざる父として、潜在的な王統の脈絡に組みこまれてきたのである。しかし冷泉帝の譲位によって、帝と源氏のそのような脈絡が断ち切られるほかない。源氏はそうした事態に、藤壺との罪が不問に [E] として胸をなでおろすとともに、冷泉帝に子がなく皇統が断絶したと嘆き、そのさしかえの関係を運命的に顧みている。そして、この文脈にも「末の世」とある点に注意されよう。源氏は、皇統との潜在的な脈絡が途切れ、明石一族を [F] 摂関家的な繁栄を望むしかなくなった状況に、自らの終末意識をいだいているのである。その「末の世」は、理想の古代とも次第に絶縁せざるをえなくなるはずである。

源氏のこのような末世意識は、やがて己が人生への終末意識へと連なっていく。柏木・女三の宮の不義密通を見顕した後の源氏に、それが異様なまでに意識されていく。女三の宮への言葉である。

人の上にてももどかしく聞き思ひし古人のさかしらよ、身にかはることこそ。いかに、うたての翁やと、[G] うるさき御心添ふらむ。（若菜下）

自分をいやな老人と自嘲する物言いの底に、若い女三の宮や柏木への嫉妬と憎悪がくすぶっている。次は柏木への、同様の皮肉である。

過ぐる齢にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督（柏木）心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり。（若菜下）

こうした言葉は、相手への言葉であるとともに自らへの言葉でもある。「世の末」に至りついてしまった己が老残の苦々しさに、自らいらだつほかない。これは、理想の古代などともまったく無縁な、一個の人生の終末を意味している。

（鈴木日出男『源氏物語への道』より）

問九 空欄 [A]・[E]・[F] に入る語句として、最も適切なものを、それぞれ次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

A 1 案じて　2 関して　3 準じて　4 即して　5 比して

E 1 減じられた　2 断じられた　3 秘せられた　4 付された　5 命じられた

F 1 役して　2 期して　3 免じて　4 擁して　5 利して

問十 傍線部①「単なる文明批評には終始していない」の説明として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1 物語の世界が理想の時代に連なっているために前代がすぐれて見えるに過ぎないということ。

2 自身の子である冷泉帝が退位し、光源氏にとって直接の皇統が断たれたということ。

3 書は後代の方がすぐれており、一概に後の時代が劣るとは言えないということ。

4 光源氏自身の老いによる衰えや終末意識が反映されているということ。

5 女三の宮と柏木による不義が光源氏を苦しめているということ。

問十一　傍線部②「世にゆるさるる」の説明として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1　音楽のみに専念して生活できること。
2　演奏の名手として認められること。
3　帝の前での演奏を許されること。
4　過去の罪を許されること。
5　高い位を授けられること。

問十二　空欄 B ・ C ・ D ・ G に入る語として、最も適切なものを、それぞれ次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ

B　1　いと　2　かねて　3　げに　4　さすがに　5　まして
C　1　あへて　2　かつて　3　せめて　4　よも　5　をさをさ
D　1　かたはらいたく　2　さうざうしく　3　にくく　4　はづかしく　5　ゆゆしく
G　1　かしこく　2　かしましく　3　かなしく　4　ねたましく　5　むつかしく

問十三　傍線部③「これを弾く人よからず」の説明として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1　琴を弾く人は世に天変地異をもたらすということ。
2　琴を弾く人は鬼神のたたりを受けるということ。
3　琴を弾く人は身分が賤しいということ。
4　琴を弾く人は不幸になるということ。
5　琴を弾く人は偏屈であるということ。

問十四　次の漢文は、傍線部④のもとになっていると考えられる箇所を含む『詩経』の一節である。傍線の部分の読み下しとして最も適切なものを、次の1～6の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩。

1　近きことなきは詩においてなり。
2　詩によりて近きものなし。
3　詩において近きことなし。
4　近きこと詩におけるなし。
5　近きこと詩よりなし。
6　詩より近きはなし。

問十五　傍線部⑤「え伝ふまじかりける」を単語にくぎったとき、各部分の品詞として最も適切なものを、次の1～6の中から一つ選んで解答欄にマークせよ。

1　副詞・動詞・助動詞・動詞・助動詞
2　副詞・動詞・形容詞・助動詞・助詞
3　副詞・動詞・助動詞・助動詞
4　感動詞・動詞・形容詞・助動詞・助詞
5　感動詞・動詞・助動詞・助詞
6　感動詞・動詞・形容詞・助詞

問十六　『うつほ物語』『源氏物語』『古今和歌集』『今昔物語集』『更級日記』を成立順に並べたとき、**2番目**のものと**4番目**のものはどれか、それぞれ次の1～5の中から一つ選んで解答欄②・④にマークせよ。

1　うつほ物語　2　源氏物語　3　古今和歌集　4　今昔物語集　5　更級日記

〔以下余白〕